

南山の風

願いよ届け「七夕笹飾り」

梅雨も落ち着いてきたころ、南山寮ではあちこちで子どもたちのお願い事を目にする事が出来ます。各ユニットで工夫を凝らした笹飾りが飾られました。

定番のお金持ちになりたいといったものから、自転車に乗れるようになりたいといったものまで多種多様でした。

七夕飾りの短冊を見ていると、前向きな事ばかりで子どもたちの希望や将来像はとても明るいものなのだと実感できます。

(文責：保育士 妹尾善之)



「かしこくなりますように」
とのお願い。頑張ってもらいたいところです。



「身長が伸びますように」と
のお願い。織姫様も大変です。

Bridge for Smile の自立支援研修



子どもたちの就業支援を行っている、サポートいずみと名養連主催の自立支援研修が南山寮で開催、NPOブリッジフォースマイルのマホ、マイケル、マッチの3名が講師として来寮してお話をしてくれました。

未来ノートを使い世の中の仕事について学習した後、各チームを国家と仮定し、他国との貿易を繰り返し利益を出してゆく「貿易ゲーム」が始まります。最後の結果もさることながら、子どもたちがチームで話し合い、他チームと交渉し、様々な状況に立ち向かっていました。最初は様子を見たり、話しかけたりすることを渋っていた子どもたちも時間が経つにつれ行動的になっていたことにとっても感動しました。

子どもたちが将来どのような職業に就くのか今から楽しみです。

(文責：保育士 妹尾善之)



夏休みの風物詩「海の家in篠島」

名産品「海の家」が開催場所を浜島に移してから7回目の夏がやって来ました。夏休みが始まってすぐのこの行事、小学生の子どもたちが目を大きくして待っていました。男子小学生10名は昨年同様で民謡舞丸さんにお世話になりました。女子小学生11名は久しぶりに民謡舞丸さんに遊びさせていただきました。

夕食のメインディッシュ! 「魚とタコのつかみどり」

名産品「海の家」は、恒例の「魚とタコのつかみどり」でスタートします。昨年までの南山崎の子どもたちは、この「つかみどり」に好奇心もメロメロと遊んでいたが、今年は中学年の子どもたちが多くなったからか、魚やタコに触ることすら恐ろしいといった感じでした。高学年の子どもたちは手慣れたもので、魚もタコもあっと言う間に捕獲していました。今年も、テンションの高かった男性職員がタコに口づけをする恒例のシーンが! 今年の夕食も、「魚とタコのつかみどり」でゲットしたメインディッシュが並び、美味しくいただくことができました。



大きなタコに驚き、なかなか海に入れない子がいる一方で、「タコ〜!! いや〜!! 気持ち悪いくっついてくる!! いや〜」と言いながらも、一番大きいのではないかと思われるタコを両手でしっかりと捕まえる子がいました。タコにおびえる子も、「魚なら大丈夫そう…」と不安そうではありますが、勇気を振り絞り海の中へ! 一度海の中に入ると、どの子もキャーキャー叫びながら楽しそうに魚を追いかけていました。魚を捕まえると「見て見て〜」「捕まえたよ〜」と嬉しそうに見せてくれました。

(文責: 指導員 大島菜月)

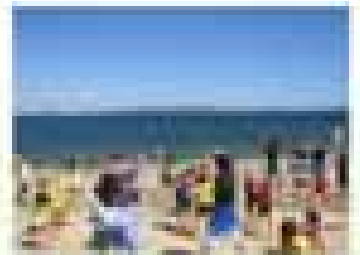
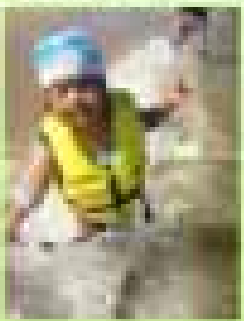
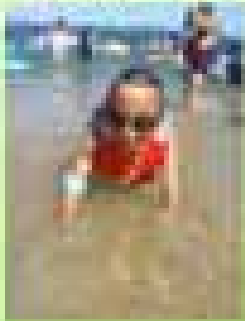
篠島の海は今年も最高にキレイでした!

「海の家」の海水浴は、ラッシュガードの準備運動から始まります。少しでも早く海に入りたくてはかの高い子どもたち一気もそそり、ソアノアしながらの準備には海が入っている様子でした。しかしながら、海水浴開始の音が「ビッ!」と鳴ると同時に海に向かってダッシュ!

それにしては、海への馴染みは深てもキレイです。今年は、海もこぼれとつなく、昨年2日目の海水浴に行っている「高瀬川」が乾りやめになるほどでした。自然の恵みで海水浴は最高のもので、子どもたちにとってはそれが嬉しいようで、その通りだったかと、海の色を撮影していました。子どもたちは、それぞれの泳ぎ方で海に遊び、職員や他の子どもたちと海ならではのコミュニケーションを楽しんでいました。

は夏休み子どもたちが必ず経験にせがめのは「海の家」です。

真夏の海水浴に遊び、笑顔もキラキラと輝いていました。



夏の一大イベント海の家 in 篠島へ、子ども21人職員10人で
行ってきました。元気良く、寮のみんなや職員さんに「いってき
まーす」の挨拶をして、バスへ乗車。興奮気味の子どもたちは楽
しくて楽しくて、バスの中でも笑い声が響きます。師崎港に到着
し、今か今かと船を待つ子どもたち。船が到着し、足早に乗船。



次第にスピードが速くなる船を外で嬉
しそうに眺めます。篠島に到着し、各

民宿に分かれてランチタイム。海が待ち遠しくて食欲も進みました。避
難所へも冒険し、いざ海へ。最初に行われたのはタコ・魚掴み大会。魚
を物凄い勢いで追いかける子、タコに絶叫する子、タコの吸盤に興味津々
な子。つかみ取り大会の後は待ちに待った遊泳タイム。うきわにつかま
り、波で遊んだり、水を掛け合ったりして遊びます。楽しい遊泳タイム

はあっという間に終わり、民宿に戻ってお風呂タイム。その後は、民宿周辺を散歩し、コンビニで
お買い物をすることもできました。そして、待ちに待った夕食の時間。巨大なゆでたタコに大興奮
の子どもたち。職員が食べやすくタコの足を切ると、「タコさん可哀想だね…大切にいただきます！」
と食育についても考えることができました。色々な種類のお刺身にご飯のお



かわりも進みます。夕食の後はみんなで花火タイム。
風が少し強かったですが、花火を見つめる子どもの
眼差しはキラキラと光っていました。楽しい時間は
あっという間に過ぎて…就寝時間。中々寝付けない
と思いきやすぐに子どもの寝息は聞こえます。



次の日は、朝早くから日差しも入り込み、子どもの
元気も復活。しかし…遊泳タイムになると、あいにくの曇り空となり、子ど
もたちは空を眺めて心配します。雨もパラパラと降りましたが、何とか無事
二日目の遊泳も楽しむことができました。帰寮してから「波が面白かった
ね」「ご飯おいしかったね」「タコの吸盤すごかったね」といつまでも思い出
話は尽きませんでした。

(文責：保育士 荻谷梨華)



郷愁誘う篠島の風景を楽しむ！



篠島に到着して最初のミッションは、高台への遠征遊覧観音寺です。東日本大震災による津波被害の激甚から、有事の際の避難場所として指定されているのが、民衆の近くの高台にある観音寺小学校跡地です。朽葉の竹藪にひっそりと立つ建物の割げ落ちたポストが歴史を感じさせます。

この朽葉の裏側に観音寺というお寺の墓場があり、本堂の屋根越しに、これから子どもたちが海水浴を楽しむ砂浜を望むことができました。

子どもたちと一緒に、観音寺の境内まで墓場の階段を降りると、羅針盤を知る碑がありました。篠島は日本の夕日百景に選ばれたお島という小島があります。かつてお島

は観音寺の寺領であり、羅針盤の碑は海難守りとしてお島に設置されていたそうです。船を見つけたAくんが、海水浴での水難事故が起らないようにと心を込めて探してくれました。そんなお島Aくんの宿舎六助



屋敷が笑顔で見つめていました。

島内には、島の人々の生活空間である新敷があらこちに見られます。新敷は、東社会になってしまった新敷ではすでに失われた文化です。子どもたちは、遠征毎に張り巡らされた狭い新敷を大はしゃぎで走り抜け、海岸へと駆けつけていきました。

篠島の観光列車の隣の近くに、法人様曰く観音の地蔵があります。これは昭和44年の昭和14年に篠島に渡り、これらのお寺に参入だそうです。夕暮時のお散歩に子どもたちがお寺立ち参るお寺子屋さんの傍にも、「西郷の愛を語りあけて母でも+観」というお碑が立っています。お碑が篠島を訪れた時代には、このあたりにお寺があったとのこと。お寺からは、お寺の賑やかな人通りとお寺のこころのお寺から聞こえてくる「なんでも+観でいいよー」のお寺が聴こえて来よう。

お寺子屋さんから民衆に参るお寺、お寺の夕暮を眺めるのが、お寺の楽しみです。



お菓子の城へ行ってきまし

お菓子の城へ行ってきまし
お菓子の城へ行ってきまし
クッキーを作ったお菓子の城へ行ってきまし
楽しい1日でした
お菓子の城へ行ってきまし
お菓子の城へ行ってきまし



JARDIN DE LA LUZ 光の庭に友情出演！

7月18日・19日の2日間。心配されていた台風は西にそれ、蒸し暑い初夏の陽射しが降り注いだ。

南山寮の子どもたちは大きなステージに立つ機会に恵まれた。この日の舞台は千種文化小劇場（ちくさ座）。KIP などのイベントでお世話になっている加藤おりはさんの～フラメンコスタジオカルダモモ発表会「JARDIN DE LA LUZ 光の庭」～に、男子5名・女子9名がゲストとして出演できることになった。一昨年の愛知県芸術劇場での舞台に続き、二度目の招待出演だ。



この日のために男子はパーカッション（アフリカ太鼓演奏）、女子はダンスとベースの演奏を必死に練習してきたのである。初めての舞台に立つ子どもたちは、楽屋に招かれ、ケータリングや大きな衣装台を目の当たりにし、演者というものを初めて実感することになる。間も無くリハーサルに入り子どもたちの表情は普段寮で見せることのない、真剣な表情を見せてくれた。緊張からか、みんな表情が硬かったが、次第にいつも通りのパフォーマンスを披露できるようになった。



そして本番、この日はすでにチケットは SOLD OUT しており、満員の観客が子どもたちを迎える。自分たちのポジションにつくと、照明が一転して明るくなり、客席からの視線が一気に注がれる。トップバッターの男の子たちのパーカッションからスタートする。ビートに乗せて、地響きのような、心臓を震わす太鼓のパフォーマンスを見せてくれる男子。多くの観客が注目する中、堂々と、そして真剣にビートを刻んだ。そして男子のパーカッションの途中に、女子のダンス&ベースパートがスタートする。Gipsy Kings の Baila Me の陽気な音楽に合わせて艶やかで、元気なダンスを披露する。全員胸を張って堂々とした演技を披露し、オーディエンスを盛り上げ、会場全体をダンスとパーカッションでひとつにする。



本番を終えた子どもたちは、「意外と緊張しなかった！」「お客さんの目がこわーい！」「やっぱめっちゃくちゃ緊張した」など、一演者としてのコメントをしたり、「楽しかった！またやりたい！」「練習した甲斐があった」と次のステージへ繋がる意欲を見せてくれたりした。

今後の子どもたちの成長がとても楽しみである。

（文責：指導員 浅井祐哉）



青年フォーラムさんによるゲーム大会

昨年に引き続き、金光教青年フォーラムの12名の皆様が来寮され、子どもたちのためにゲーム大会を企画して下さいました。オリンピックブース大会と名付けて以下のゲームを用意いただき、子どもたちは各種目にチャレンジをしました。

つんで！つんで！箱積みゲーム

30秒以内に複数の箱を積み上げて、高さを競うゲーム



めざせガンマン！射的ゲーム

的を鉄砲で狙って倒すゲーム



玉入れゲーム

輪投げのように、高さの違う穴にボールを入れて得点を競うゲーム



豆移しゲーム

皿から皿へ小豆を箸で移すゲーム



ドキドキ200gゲーム

選んだ物の合計が200gに最も近い人が勝ちというゲーム



どのゲームも子どもたちを夢中にさせてくれるゲームで、子どもたちは真剣そのもの、自分が出した得点に一喜一憂していました。

箱積みゲームも、ドキドキ200gゲームも、豆移しゲームも、いたってシンプルな遊びなのですが、子どもたち以上にはまっていたのが職員です。特に、割り箸で小豆をつまむのがなかなか難しく、子どもたちよりも低い成績に愕然としていました。

1位から3位になった子どもたちには手作りのメダルが授与されました。4種類のメダルをゲットしたMちゃんはみんなの前で表彰されて嬉しそうでした。

八事杵中心しぎ散歩⑤

宝珠院の墓地になぜ市営共同墓地の碑？

隼人池のほとりに宝珠院というお寺があります。名古屋市天然記念物に指定されたイヌナシが2本自生していることでも有名です。天正年間に創建された宝珠院は、清須越しで白川町にあったものの、戦時中に戦争疎開でこの地に移転してきたお寺です。寺域内に墓地があるのですが、その一角に「市営八事共同墓地」という碑があります。ただし、碑の文字の最後の部分は地中であって見えません。なぜ宝珠院の墓地に名古屋市営共同墓地の碑があるのでしょうか。名古屋市営共同墓地が八事にできたのは大正4年…当時白川町にあった宝珠院のお墓は、市営八事共同墓地にあり、宝珠院が戦争疎開で現在地に移転した際、寺域内に墓地を設けて市営共同墓地から墓石を移動しました。その折に、「市営八事共同墓地」の碑も宝珠院の墓石群にまぎれて引っ越してきてしまったのではないかと推察されます。



コラム 南山隼人 アメリカの貧困に見る日本の未来像

ここ最近の報道には、安民法制との関連で「経済的徴兵制」という言葉が散見される。2008年に岩波新書から出された『ルポ 貧困大国アメリカ』：。貧困にあえぐ若年層の実態と、その若者をターゲットにして「兵士」として供給する「経済的徴兵制」のシステムが描写されている。筆者の堤美果氏は、アメリカ社会の歪みを告発しながら、生存権という人間にとって基本的な権利を取り戻すことが戦争のない社会に繋がるとして、アメリカの後追いをする日本に警告を発している。

1972年に徴兵制が廃止されたアメリカで、若者を軍隊に動員するために「貧困」が利用されてきた。ブッシュ政権が打ち出した教育改革法「一人も落ちこぼさない法」は、全米のすべての高校に生徒の個人情報をもとにリクルータを提出することを義務付けた。軍のリクルータは、そのリストで入隊を勧誘。入隊する若者の入隊動機の1位は大学の学費の軍による肩代わりだ。貧困から抜け出すために大学に行く。その限られた選択肢としての入隊。入隊動機の2位はなんと医療保険。入隊すれば家族も無料で治療が受けられるのだ。貧しい地区の高校生は、家族も含めて無保険の家庭が多い。イリノイ州のある若者は、「この国で高卒では未来がない」と、無理をして大学を卒業したが、職がなかった。残ったのは奨学金約5万ドルの返済と、在学中の生活費に消えたクレジットカードの借金約2万ドル。アルバイトを掛け持ちして返済に追われたが、そんな生活を変えたいと05年に軍に入隊。国防総省が奨学金返済を肩代わりする制度があるためだ。米軍には他にも、除隊後の大学進学費用を支給する高卒者向けの制度もある。若い入隊者の多くは、こういった学資援助の制度に引かれて志願する。イリノイ州の彼は入隊直後、イラクに約1年派遣されたが、帰還兵特有の心的外傷後ストレス障害(PTSD)を患い、働けなくなった。貧困から逃れるはずだった彼に待ち受けていたのは、さらなる貧困だった。堤氏はさらに語る。「社会保障費や教育費の削減とともに、経済的困窮者の入隊が増えたのです。特に2008年のリーマン・ショック以降、軍は入隊の年齢制限を緩め、若者だけでなく中年の兵士も受け入れています。」

日本でも「格差」「子どもの貧困」が問題になって久しい。大学生の半数は何らかの奨学金を受給し、低賃金や失業による返済滞納も増えている。働いていても生活が苦しい「ワーキングプア」がさらに増える可能性が高い。だからこそ、マスコミは、安民法制と貧困との兼ね合いで、アメリカ型の「経済的徴兵制」社会を日本が追従すると危惧しているのではないだろうか。池上彰氏も著書『子どもの貧困』の中で語っているが、社会的養護下で暮らす子どもたちが、貧困の連鎖という悪循環から抜け出せるような自立支援の仕組みをきちんと構築することは喫緊の課題である。「格差の拡大」「若者の貧困」「戦争」というキーワードが、日本の未来像、施設の子ともたちの将来像には無縁であることを願って止まない。(リョウウチヨ)

平成27年 8月号
(月刊：毎月1日発行)

<明治19年10月 第三種郵便物無認可>

発行：社会福祉法人 愛知育児院
児童養護施設 南山寮

編集責任者：施設長 山田 勝己

〒466-0835 名古屋市昭和区南山町5番地

TEL (052)831-3750 FAX (052)835-7483

e-mail: nanzanryo.1909@space.ocn.ne.jp